人 物 紹 介

熊 谷 岱 藏

仙台逓信病院 本宮 雅吉

熊谷岱藏博士は明治13年（1880）7月13日，代々医業を営む熊谷家6代目の三男一女の長男として，長野県東筑摩郡洗馬村（現，塩尻市）に生まれた。明治19年6歳，洗馬尋常高等小学校入学。明治26年13歳，塩尻尋常高等小学校卒。明治26年4月，長野県立松本中学入学。同校卒業後，高等教育，特に医学系には不可欠とされていたドイツ語習得のコースを選択。明治31年18歳，東京外国語学校ドイツ語科入学。明治32年，第一高等学校予科第三部入学。明治35年，東京帝国大学医科大学入学。26歳，同大卒業。

明治42年（1909），渋沢栄一を団長とする渡米実業団とともに医療制度，教育事情視察のため出張。当時，アメリカ人の医師はすべてドイツ語を理解し意見交換はすべてドイツ語で行われた。博士はワシントン大学で予定外の講演をすることになり，一夜づけで原稿を書き上げ発表を行い喝采を浴びた。明治44年，シベリア鉄道経由でドイツに私費留学。父陸蔵の期待の大きさをうかがい知ることができる。

大正2年（1913），33歳の若さで東北帝国大学医学専門部教授就任。大正4年には博士考案の人工気胸器を用いた結核治療における気胸療法の有効性が発表されている。博士は大正5年頃から糖尿病の研究を開始し，大正11年には膵ホルモン（インシュリン）の分離，抽出に成功したが，喜びも束の間，バンチング，マクレオド等によるインシュリンの発見がタッチの差で先行したことが報ぜられ，ノーベル賞受賞のチャンスを逃した。弟子たちの嘆きをよそに，博士はいささかの動揺もみせず，結核の研究の道を突き進んだ。昭和の初期，結核は国民病とみなされ，結核撲滅の歌が作曲されたほどであったから，博士の方針は当然といえよう。博士の本格的結核研究はこのころ始まり，結核の発生，遂進様式の解明，集団検診の普及，BCGワクチンの開発，応用，さらに結核治療法の確立が主目標であった。

昭和15年（1940）には東北帝国大学第7代総長就任。戦時中，緊迫した雰囲気の下，教職員，学生と苦楽を共にした。昭和16年12月には東北帝国大学抗酸菌病研究所が設立され（裁可は時の内閣総理大臣 東条英機），生命保険協会の寄付金などにより設立された社団法人厚生会，仙台厚生病院を臨床研究の場とし，直接，患者のニーズに応えることが可能となった。第二次大戦中，博士は2児を戦場で，自宅を空襲により失った。度重なる受難にも屈することなき博士の日常は結核との絶え間なき闘いであった。

熊谷岱藏先生墓石・信州塩尻市長興寺

昭和26年には博士等の尽力による結核予防法公費負担制度が導入され，これが結核対策に大きな役割を果たすこととなった。抗結核剤では，ストレプトマイシン（SM），パラアミノサリチル酸（PAS）に引き続きイソニコチン酸ヒドラジド（INH）の優れた治療効果が実証された。

INHについては今は半ば伝説的となった博士にまつわるエピソードがある。昭和28年（1953），まだ外国文献の入手がきわめて困難な時代，博士はアメリカ軍（進駐軍）向けの英語ラジオ放送を直接耳にし，INHが結核に著効を示すという報道に驚喜し，直ちに研究所薬理部門にINH合成を依頼し，臨床応用を開始した。華々しい初期の報道内容とは異なりINHのみでは結核を制圧することができないことが間もなく明らかとなり，SM＋PAS＋INH併用の3者併用療法の（3剤併用ではなく博士は3者併用と命名した）卓越した治療効果が時と共に明らかになった。博士は世界の主流におもねることなくINH

は間歇投与が連日投与に勝ることを主張した。昭和35年，東京で開催された国際胸部医学会では会頭としてINH間歇療法の合理性を力説し，注目を浴びた。薬剤耐性結核菌対策が話題となってからは，結核腫融解を目的とした高濃度ツベルクリン注射，薬剤耐性菌持続喀出患者には抗結核薬完全中止，サルファ剤の有効性評価なども試行されたが，高度経済成長，国民生活レベルの飛躍的向上とともに，未完成のまま，治療の主流は上記の3者併用療法から，いわゆる二次抗結核薬の登場期を経てリファンピシン（RFP），INH，ピラジナミド（PZA：再評価された）主役時代へと移行した。

博士は統計学的手法には必ずしもこだわらず個々の症例を大事に根気強く観察するタイプであった。切除標本は1つ1つ確かめINHの連日投与による気道粘膜の充血が喀血の誘因であると推論した。まさに観察（observation），推論（deduction），結論（conclusion）の権化であった。

博士がいつも口にする言葉は“ヘナヘナは駄目”，“何でも世界的じゃなくちゃ”。弟子たちはこれをクマガイイズムとよんでいた。博士は40歳を過ぎてから書を学び，絵を嗜んだ。雅号は泰通，好んで花木を描いた。文人墨客との交流の機会も多く，南画や書を通じて小宮豊隆，木下杢太郎，阿部次郎らとは胸襟を開くサークル仲間であった。昭和31年7月には第二の故郷仙台市の名誉市民に推挙されたが，生まれ故郷信州をこよなく愛し，不帰の病の床に就いてからも野沢菜と蜂の子を所望したほどである。昭和37年2月19日，家族，愛弟子に看取られつつ永眠。意識は最後まではっきりしており“グッドバイ”が別れの言葉であった。

〔文献〕

1）宮坂勝彦編：銀河グラフティ「信州人物風土記 近代を拓く 21. 熊谷岱蔵」. 銀河書房，1989.
2）東北大学抗酸菌病研究所創立50周年記念誌．1993.